「今日の説教、聴き手のために」　2009/5/10　明治学院教会（154）

「眠れていますか」　岩井健作牧師

コヘレトの言葉５章７節－１９節

１、「貧しい人達が虐げられていることや、不正な裁き、正義の欠如などがこの国にあるのを見ても驚くな。」(5:7)。酷い時代だな、と思います。国（メディーナ）は「州」。ペルシャ帝国の支配体制を示す言葉。州の虐げの中で自治権を持つ「王」が命の根源である「耕地を大切にすること」が「益」だといいます。大変大ざっぱな見方ですが、歴史家はイスラエル民族の土地を巡る体制を「部族生産様式」「年貢生産様式」「奴隷制生産様式」の変化として捉え、コヘレトの時代は奴隷の時代と見ています。そこで「農」が基本であるとは、なかなかの見識です。

２、「銀を愛する者は銀に飽くことなく」(9)。「銀」（ケセプ）は貨幣・現金とも訳せます。コヘレトに６回出てきます。金持ちの貪欲の空しさが語られます。財産の守りに心配が募って眠れない者がいることはうなずけます。もちろん貧しい人には余計不眠があったでしょう。ブラジルの中の瀬重之神父が書いた解説（『喜んで・・』）によると「飢え、栄養不良、借金や重労働といったものは、ほかの貧困の結果と同じように、不眠と疲労をもたらします。しかし、コヘレトは多分、経済的に恵まれ状態にいたのでその方面は無知であったと思われます」(p.75)と書いてあります。たとえそうだとしてもなお、「働くものの眠りは快い」(11)は至言です。

３、「太陽の下に」(12)はエジプトからの間接支配をしているプトレマイオス王朝に代表されるギリシャ人の文化ヘレニズムの生活様式を象徴する表現だといわれています。それは、巨大な軍隊、都市国家の創設、自由通商、海洋の征服、そして奴隷制の確立が実行された世界です。そこに金持が下手な取引で富を失い息子に何も残さなかった現状を見て、「人は、裸で母の胎を出たように裸で帰る」と空虚な現実を語ります（ヨブ記1:21）。「風を追って苦労したところで何なろうか」(15)。

「風」は政治権力を象徴的しています。「風になびく葦」がいたのです。

４、「自らの分をわきまえ、その労苦に結果を楽しむように定めされている。これは神の賜物なのだ」(18)。肯定的な発言です。「神に与えられた人生」(17)という捉えかたをし、「日々に食い飲みし」（ベブル語では＜食い飲み＞の順序）が勧められます。人生を肯定的に捉えること、「神はその心に喜びをあたえられる」(19)ともう一度念をおしています。

５、コヘレトの時代、農民や貧しい人が極端に生きにくい時代でありました。しかし神の賜物（支え、肯定）を見抜くヒントが示唆されます。「働く者の眠りは快い」はその一つです。現代の不眠は文明の大きな問題です。「国民」の五人に一人は不眠を訴えています。『入眠障害』『中途覚醒』『熟眠障害』『早期覚醒』。それは、ストレス、生活習慣からきます（５月１１日20:30-20:45(15分）ＮＨＫ教育　睡眠障害についての悩み解消の番組がある）。コヘレトは「眠れる」という事に「神の賜物」のヒントを示唆しています。ヒントは大事。五木寛之『生きるヒント』（角川文庫）は人生論ではない。ヒントは示唆であった回答ではありません。きっかけであって、あとは自分で考えて生きる。コヘレトは生きるヒントの書物です。